
鬼姫

railgun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼姫

【Nコード】

N2834BA

【作者名】

r a i l g u n

【あらすじ】

作者がエロゲのシナリオとして書いたものです

しかし、エロ要素の入る余地がなかったので投稿してみようと思いませんでした。

取りあえず、少年が成長していくストーリーです

プロローグ

午後10時、そんなに遅い時間帯では無いけれど、街灯が少ないので真っ暗闇に近かった。

「けっこう遅くなったな」

時計を見ながら呟く。

「早く帰らんと・・・どうせ誰もいないが」

近道をしようと思い、人気の少ない鉄橋を渡ろうとした。

半分近く歩いた時、ふと道の真ん中に誰かがいるのを感じる

目を凝らすとそれが一人の少女だと分かった。

こんな所で何やってんだろっ、と思いながら残り半分を渡ろうとする・・・その時

「あっ」

少女がこちらに気付く

「駄目！こっちに來ては！」

ふと、周りが明るくなる。雲に隠れていた月が明るく照らす

「今日は満月か・・・って、何だ・・・あれ」

少女の頭から何かが飛び出している

「あれは・・・角？」

その瞬間、少女はいなくなつた

と、気付いた時には少女は自分の真正面にいた

すると口をガバツと開けて、首もとを喰らいつく

「グハっっ！！！！！」

直後、噛まれたと分かった時には気絶していた・・・

プロローグ（後書き）

ふつつか者ですがよろしくお願いします

未知との遭遇

昔のことを思い出していた

妹と共に父さん達と過ごしていた日々だ
多分、あの頃が一番人間らしかっただろう．．．．．そして、今は―

「あつ」

目を開けると、さっきの少女がいた

咄嗟に身構え．．．．．れなかった
自分は布団の中にいた

「良かった、意識が戻って」

「．．．お前、何者だ？何だ、さっきの角みたいなのは？」

「えっと、信じてくれるかな？実は私．．．．．鬼なんだ」

「は？」

目が点になるとはこのことだろう
しばらく思考が停止する

「あー。やっぱり信じてくれてないよ」

「いや、それを信じられる奴が信じられない」

「おつ、上手だね」

「黙れ。とりあえずお前はさっき俺に何をした？」

「えつとね、あなたの血を吸ったの」

「.....」

そう言えば肩がヒリヒリする

「で、何で血を吸ったんだ？」

「私、普段は鬼にならないんだけど

満月を見ると鬼になるの。スーパーサ
いにね」

イ 人みた

「それで？」

「あ、スルー！？」

「続ける」

「それでね、鬼になると記憶が飛んじやう上に人の血が欲しくなる
んだよね」

「何か後遺症は？」

「普通はないよ」

「そうか、じゃあ帰る」

立ち上がってふすまを開ける

開けた瞬間に見たのは外・・・

外の満月だった

突然、頭が痛くなる

まるで何かが飛び出してくるような

「ツツうわアアア！！！」

自分が自分でなくなる感覚

気絶してから30分後に再び意識をなくした・・・

鬼の素質

再び目を覚ました時は布団の中・・・ではなくはりつけにされていた

「なんじゃこりゃー!!!」

「あ、目を覚ましたね。父さーん！」

しばらくして、少女の父親が出てきた

「意識が戻ったようだね。由姫、少し席を外してくれ」

「はい」

由姫という名の少女はすぐに出ていった

「さて、と」

「あんたら本当に何者なんだ」

「その前に一つ謝りたいことがある」

すると、由姫の父親は頭を深々と下げる

「すまん、君を鬼にしてしまった」

「.....」

信じられない、いや、信じたくない
これ以上人間から離れたくない

「どういう意味だよ。さっきあんたの娘は噛まれたぐらいじゃ鬼にならないって言ってたぞ!!」

「普通はね」

「何？」

「大変言いにくいけれど、君には鬼としての素質が元々あったらしい……」

「……」

お互いの沈黙が続く

「……なるほど。どう足掻いても俺は人間らしくなれないって訳か」

自分を責めるように呟く

「そう言えば君、両親は？」

「いない、事故で昔死んだ。」

「そういうことが……それで鬼になるのも仕方ない」

「どうして？」

「心に深い傷を持つものは鬼になりやすい。多分、心の何処かで人であることに疲れを感じてるんだな」

「．．．．」

認めたくはないが、その通りかもな

「ところで君、名前は？」

「俺の名前は優治と．．．言います」

母がつけてくれた名前

今は自分にとって重荷でしかない

その後の話

アパートに帰ると、どっと疲れが溢れてきた。優治は由姫の父親の車で送ってもらった

帰り際に言われたことを思い出す

「明日もう一度話をしよう。朝9時に由姫に迎えにいかせるから」

風呂も入らずに布団に入る
とてもそんな気分ではない

首筋を手で触れる。あんなに深く噛まれたのに傷ひとつなかった

「鬼に・・・なったってことか」

これから思うと本当にいやになってくる

「いつそ本当に鬼になった方が・・・」

睡魔に襲われ、優治は眠りにつく

その後の話（後書き）

短すぎました

鬼の住む家

「ピンポン！」

朝からチャイムの音が聴こえてくる

不快感を感じながらも優治は布団から出てくる。

ドアの鍵を開けた瞬間、勢いよくドアが開かれた

「おっはよー、優治君！」

鬼を名乗る少女が挨拶をする

「・・・何のようだ？」

「やだなー。迎えにいくって昨日言っただじゃん！」

「・・・そうだったな。」

今日は土曜日。朝から不快感が最高潮に達しながらも由姫についていく

「それにしても昨日行っただけなのによく俺の家が分かるな」

「えへへ、昨日君が寝てるときにこっそり探索機をつけといたからね」

「まず、警察に行ってもいいか？」

「ウソウソ、冗談だよ。鬼の気配を辿ったの」

「何だそれ？」

「えっと、私達鬼は互いの居場所が分かるの。優治君も慣れてくれば分かるよ」

『私達』、このフレーズが気にかかった
この女のように自分は今や化け物

「他に鬼はいるのか？」

「その事は後でゆっくり話すよ。っと、あれが私の家だよ」

指をさされた先に目をやる

昨日は暗くてよく分からなかったが、かなり大きい和風の家だ

「我が鬼塚家へようこそ」

そうして優治は鬼の住む家へと入っていった

鬼の呪い？

屋敷に入ると、着物をきた見知らぬ女の子がこっちに来た

「あつ、鬼姫様。お帰りなさいませ」

「鬼姫っていわないでよ。由姫って名前があるんだから！」

軽く口を尖らす由姫

「うふふ、はい由姫様。っと、後ろにいらっしゃいますのが例の殿方様でございますね？」

「あ、紹介が遅れたね。彼女は仕様人で仁田真琴って言うの」

「おはようございます、優治様」

「ああ、おはよう．．．ございます」

急に恐縮してしまった

「真琴とお呼びくださいね」

「はい．．．。」

「そう言えば、由姫様。」

「何？」

「旦那様がお呼びです。客間に来るようにとおっしゃっていました」

「分かった、じゃあ行こう優君」

「待て、何だその呼び方は？」

「だって優治って長いし。今日から優君ってよぶね」

「もう、勝手にしろ・・・」

本当に疲れる、この女
こんな奴に鬼にされるなんて

「優治様！」

ふと、真琴さんに声をかけられる

「はい、何ですか？」

「あの、由姫様と仲良くしてあげてください」

「無理ですよ」

「由姫様はずっと一人で鬼の呪いに苦しんでいたのです。貴方様のような方がいらっしゃってくれて良かったです」

「呪い？」

「さっ、早く行こう優君！」

急に話を中断されて、優治は客間へと連れていかれた

鬼塚家の秘密

客間に通されると、すでに由姫の父親がいた

「おはよう、優治君」

「・・・おはようございます」

「さて、改めて自己紹介をしよう。私の名は秀昭だ、よろしく」

「・・・よろしく願います」

「そんなに緊張する必要はないけどな」

「で、話って何ですか？」

「うん、そうだったな。えーと、どこから話そう・・・何か聞きたいことはあるか？」

「さつき真琴さんが鬼の呪いとか言っていましたけど、どういう意味ですか？」

「うん。じゃあ、そこから話そう」

「昔話になるんだが、ここ鬼塚市はかつては大きなパワースポットでね。鬼とか妖怪とかがたくさんいたんだ」

「もう最初から話がぶっ飛んでいますけど」

「優君、人の話は最後まで聞いてあげて」

「で、その土地をおさめていた殿様と姫様がいたんだけど．．．。ある日姫様が鬼の子供を身籠ってしまつてね。当然、殿様はその子供を流産させた。それから悲劇が始まつたんだよ」

「悲劇？」

ふと隣りを見ると由姫が静かにうつむいていた。

「姫様はその後お見合い相手と結婚して子供を産んだ。しかし、子供には鬼の角が生えていたんだよ．．．。」

「なるほど、それが鬼の呪いという訳ですか」

「ああ．．．。」

秀昭が小さく肯定する

「由姫はその姫様の子孫だね。先祖代々生まれた子は皆鬼の子だった．．．あの子の母親もね。」

「そう言えば、由姫さんの母親は？」

「いないよ」

突然、由姫が口を開く

「お母さんは．．．私を生んですぐに行方不明になったの」

「．．．．．」

重い沈黙が続いた

「さて、ところで君は一人暮らしだそうだね」

「そうですが．．．何か？」

「君がこうなってしまったのも私達のせいだ。せめて君の生活はこちらで保証させてくれ」

「と、いうと？」

「この家に住まないか？」

「．．．．．」

どうせあの家には何の思い入れはない
しかし急過ぎる話だ

しばらく考えて答えを出す

「．．．．．分かりました。言われた通りにします」

「やったあー」

今度は由姫は満面の笑みでこちらを見つめる

「じゃあ、荷物の整理をしてきてくれ。おい、真琴！」

ふすまが開く

「お呼びですか？旦那様」

「ああ、由姫と優治君と一緒に彼の家に行ってくれ。荷物の整理があるから」

「かしこまりました」

そして三人は優治の家に行った

導く答え

三人は優治の部屋の前に立っていた

そして優治は鍵をとりだして開けようとする……のだが

「あれっ、鍵開いてるぞ？」

「ひょっとして泥棒！？一度会ってみたかったんだよね」

「由姫様、そんな物騒な事をおっしゃらないでください！しかし、真っ昼間から泥棒ですか？」

「確かに少し考えられないですね」

休みの日の昼間から泥棒する奴がいるとしたら由姫並の馬鹿だよな
と思いながら恐る恐るドアを開ける

玄関を見ると一足の靴があった
瞬間、優治の体に緊張が走る

「…………紫織。」

すぐさま家の中へ駆け込む。すると、リビングに一人の少女がいた

「兄さん、お久しぶりです」

「何でこんな所にいるんだ？」

絞り出す様にして尋ねる
嫌な汗が出てくるのを感じる

「お話があつて来たんですが．．．．そちらの方々は？」

「お前には関係のない事だ」

「また．．．私の知らないところで無茶をしてるんですね」

「よ、用件は何だ？」

軽い罪悪感を感じる

「また、こちらに戻ってきて頂けませんか？」

「それは．．．出来ない」

「どうしてですか？」

「俺は今日からこいつらの家に住むことになったから」

「そうやって、また私を置いていくんですか？」

「ツっつー!!」

胸が締め付けられる

逃げたいけど．．．出来ない

「兄さんはあの日、これ以上迷惑をかけたくないと言って私を置いて

て出ていきました！でも．．．本当は違いますよね？」

呼吸が速くなる
足が震えてくる

「兄さんは私といたくないんでしょう？」

「ち、違う．．．。俺は．．．もう誰も失いたくなかったから．．．だから」

「だから、私を見捨てたと？」

力なく頷く

もう、嘘について逃げたくない

「私は兄さんの前から一度もいなくなったことはありません！むしろ、兄さんが自分からいなくなっているんですよ？」

「お互いに大切な人がいなくなる悲しみは知っているはずです！．．．なのに．．．どうして私と一緒にいてくれないんですか？」

「ごめん、紫織。本当に駄目な兄だな」

「身寄りのない俺達を引き取ってくれた父さん達に顔向けできないよ．．．」

「兄さん、私を置いていかずに一緒にいてくれませんか？」

もう、逃げない

「ああ。俺は二度とお前を見捨てない」

「あの、お取り込み中悪いんですが私達を完全に忘れてるよね？
優君」

「あつ、悪い。お前らいたんだっけ」

「何その態度！？ひどいよ」

「取り敢えず、荷物の整理をしましょう優治様！」

「分かった、そうだ紫織！」

「はい、何でしょう？」

「少し荷物整理手伝ってくれないか？そして終わったら一緒に来てくれ」

「はいっ、分かりました」

すぐに紫織が笑顔になる

久しぶりに自分も笑顔になれた瞬間だった

新しい同居人

「・・・・・・・・・・・・・・・・つまりそういう訳なんだ」

客間にいるのは優治、由姫、秀昭、そして紫織の四人
今秀昭が事の経緯を紫織に話したところだった。

「・・・・・・・・兄さんが・・・・・・・・鬼？」

声が震えている

まあ、当然か

「・・・・・・・・かつこいいですね」

紫織以外の一同がズコツと漫画のように倒れる

こいつ・・・・・・・・天然すぎる、由姫以上に

「何か特殊能力とかが使えたりするんですか？」

「えっと、鬼になったときに戦闘力がぐーんと上がるね。他は、普段から回復力が高いぐらいだ」

「太陽の光とか大丈夫なんですか？」

「血を吸うといっても吸血鬼ではないからね、大丈夫だよ」

「じゃあ鬼って凄く便利ですね」

由姫が急に口を開く

「それでも．．．やっぱり普通の体に戻りたいよ．．．」

「あつ、ごめんなさい由姫さん。私、無神経すぎました」

「紫織ちゃんが謝ることはないよ。変な事言つてごめんね」

何だか空気が重い

別の話題を作らねば．．．

「そつえば、学校とかはどうするんですか？」

「ああ。その事なんだが、優治君には今の学校を転校してもらつ」

「構いませんが、理由だけ教えて下さい」

「満月を見ると鬼になるつて言っただけ例外はあるんだ。激しい感情の変化によつては鬼にならないとも言切れない」

「なるほど。しかし、どの学校に行つてもその危険はあるんじゃないんですか？」

「まあそうなんだが、君の転校先の学校は普通の所とは事情が違つんだ」

「世の中からみて明らかに異質な力を持っている生徒達の学校なんだよ」

「訳あり集団ですか。」

「そうだ。もちろん由姫もその学校に通っているが、特に大きなト
ラブルもない」

「なら、私もその学校に通いたいです！」

突然、紫織が間に入ってきた

「兄さんと一緒の学校がいいです、出来ませんか？」

「よし、分かった！学園長とは顔馴染みだから何とかなるだろう」

「ハアー、良かった」

ホッと安堵する紫織

「紫織もこの家に住むのか？」

「秀昭さんや由姫さんが迷惑じゃないなら一緒に住みたいです」

「私は別に構わないが」

「私も紫織ちゃんみたいな可愛い妹が欲しい！」

「じゃあ・・・」

「ああ、我が鬼塚家へようこそ紫織君」

「はい、よろしくお願いします！」

元気よく答える紫織

話は上手くまとまったようだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2834ba/>

鬼姫

2012年1月14日23時08分発行